主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	下田　健太郎

主 論 文 題 名：

水俣病経験の想起をめぐる歴史人類学　－響き合うモノと語りの通時的分析を通して－

（内容の要旨）

水俣病の原因となったチッソ工場がかつて汚染物質を直接排出した水俣湾は、熊本県の公害防止事業のなかで 1990 年に一部が埋め立てられ、公園として整備されてきた。その親水緑地の一角に 52 体の地蔵や恵比寿、その変異型、さまざまなモチーフの造形物が不知火海を臨むように立っている。水俣病被害者有志を中心とする「本願の会」の方々が 1995 年から建立してきた石像である。本研究は、「本願の会」を中心に展開している水俣病経験の想起をめぐる文化的な諸形態の歴史性について多面的に明らかにすることを目的とした。

埋立地の整備・活用をめぐって諸団体が作成した要求・抗議文書の内容分析から、水俣病問題を収束させようとする政治的状況に対して、被害者たちが制度的救済では癒えなかった心情を表現するための場として埋立地そのものを捉え直してきたことが明らかとなった。「本願の会」の人々も、その経緯のなかで折々に石を刻み、石像を設置してきたことは間違いない。しかし、計 26 ヵ月間にわたるフィールドワークを通して見えてきたことは、それらの石像が単なる水俣病被害の政治的表象なのではなく、モノと語りのあいだを往還しながら継起的に想起してきた水俣病経験を人々が今なお生き続けている現実であった。そのプロセスを析出するために、本研究では以下の手法で、響き合うモノと語りの民族誌を通時的に記述することにつとめた。

まず、石像 52 体の緻密な観察・記録・図化をもとに、その形態と空間配置の経時的変化について分析し、「本願の会」による石像が、メンバー間の（ときにモノを介在させた）対話のなかから生み出されてきたモノであることを明らかにした。設置された石像は埋立地景観の一部となることで、製作者本人に、そしてその他の製作者に対しても新たな行為の可能性を提供し続ける。そこで次に、「本願の会」に属する 3 名のインフォーマントによって時どきに発せられた語りの資料や、2006 年から足掛け 10 年にわたるフィールドワークなかで聴取した語りの記録を、その各人が製作してきた複数の石像とともに時系列のなかに整理した。そこから、水俣病経験の想起には言語化し得ない心情が含まれ、それらがモノによって表出され、そのモノが語り直しを繰り返し促し、そればかりでなく、モノ自体が時の流れのなかで風化し、そこに生き続けることが水俣病経験の新たな想起の契機となってきたことを析出できた。とくに、あるメンバーの語りが、「父親の敵討ち」から、すべての生きものへの謝罪に転換・拡張し、「胎児」・「オタマジャク

シ」をかたどった石像の建立後に、彼が失われたものたちの視点から水俣病の物語を紡ぎ始めたことは印象的であった。

本研究がめざした通時的民族誌の目論見の１つは、過去の出来事や経験が選択され、意味を与えられ、現在において再文脈化される歴史構築そのものを、より長期の歴史人類学的視野に位置づけることによって、過去の経験の対抗的客体化を認めつつも、それらを継起的に想起され続ける経験の一断面だと示すことにあった。そのプロセスをモノと語りの響き合いとして記述することによって、予め設定された意図に沿って過去の経験が構築されるのではなく、想起される経験が継起的でありながら偶発的に移ろいゆくあり様を析出できた。想起のプロセスをモノと語りの響き合いとして通時的に分析する本研究の手法は、出来事のクロノロジー的再構成、記憶の政治性や文化の構築性の強調に陥ることなく、被害と加害、分析対象とコンテクスト、主体と客体、現実と表象というさまざまな二分法的図式を乗り越える一つの方途を指し示している。

（各章の概要）

序章　本研究の目的と視座

本研究の理論的視座を論じた。まず、加害と被害という対抗的図式からはこぼれ落ちるような水俣病経験の想起のありようを捉えるために、歴史人類学の諸成果をもとに、二分法的図式を前提としない歴史記述のあり方について検討した。そこでは、多様な諸集団それぞれの内部の多様性に目を向けつつ、絡み合いによる相互変容のプロセスを通時的に読み解いていくことの重要性が浮かび上がってきた。ただし、そこには、差異化のための言説や対抗的なアイデンティティに注目し、それを固定的・本質論的に捉えることによって、再び二分法的図式へと舞い戻ってしまうという陥穽も看取できた。そこで、過去の出来事や経験を選択し、意味を与え、現在において再文脈化するという歴史構築のプロセスそれ自体をより長期的な視野に置き直すことによって、対抗的な客体化や政治的・戦略的な主体の存在を認めつつも、それを時空間の連なりの一断面と捉え、さまざまに変化する歴史構築や主体の柔軟なありようを議論していくことが重要であると論じた。加えて、差異化のための言説とは異なった仕方で紡がれる歴史のあり方に目も向け、そこに現れる様々な「歴史のエージェント」を「現実」として捉え直す「歴史実践」論の理論的可能性を指摘した。

第二に、歴史のエージェントとしてのモノについて理解を深めるために、「物質文化研究」と呼ばれる学問的潮流の検討を通じて、モノの働きを捉えるための視点について考察した。その結果、「本願の会」メンバーによる石像製作の実践を捉えるためには、モノと語りを分析対象とコンテクストの関係に還元してしまう「解釈人類学的なモノ研究」では不十分であることが明らかとなった。むしろ、想起にかかわるモノの力に着目しつつ、モノと語りの実践の関係性を通時的に読み解くことが重要となる。そこで、モノ

の意味の転換やその継起的な連鎖を時系列に沿って考察する「モノの再文脈化」論、及びジェルのエージェンシー論の批判的検討を行ったところ、対象化されたモノ（object）を前提とすることなく、人間の意図のみには還元し得ないモノの働きやその特性（存在の仕方やその移ろい）を注視していく通時的アプローチの重要性が浮かび上がってきた。そこで、このアプローチと「歴史実践」論を組み合わせつつ、水俣病経験の想起のプロセスを、モノと語りの響き合いとして分析していく点に本研究の視座を見出した。

第１章　調査地の概要

水俣市の概要を述べた上で、水俣病の原因企業であるチッソ工場が水俣に設立されることで工業化が進展した 1908～56 年、水俣病が顕在化して以降、政府による公害認定までの 1956～68 年、公害認定を受けて水俣病第一次訴訟が提訴され、チッソとの補償協定の締結というかたちで一定の成果を挙げた 1968～73 年、未認定患者運動が興隆するとともに、地域再生に向けて水俣湾の埋め立て事業が進められた 1973～90 年、完成した埋立地を舞台に地域再生事業が進められてきた 1990 年～現在、という 5 つの時期に区分した。

さらに、上記の時期区分に沿いながら水俣研究の歩みを概観し、水俣病顕在化以前の水俣研究が、それ以後にどのように読み直されてきたのかを検討した。その結果、(1) 水俣病が顕在化する 1956 年以前の水俣研究のなかでも、学校教育の関係者によって編纂された郷土誌においては、水俣の名士である深水家の歴史を中心とした明治以前までの郷土の歴史性が重視されていたこと、(2) 1956～73 年までの水俣研究は、水俣病の訴訟支援を目的としていたことを背景に、企業・行政といった加害者 vs 被害者という対抗的図式を前提とし、その実態解明を重視していたこと、(3) 1973～90 年までの時期には、「不知火海総合学術調査団」による大規模な学際的研究によって、水俣病が顕在化する以前の水俣研究の意義が見直され、上記の対抗的図式が民衆史的な視点から相対化された一方で、近代社会と被害者、あるいは近代と伝統という新たな対置が認められたこと、(4) 1990 年以降の水俣研究においては、史実としての歴史だけでなく、歴史叙述のあり方や表象としての歴史、歴史構築といった問題領域へと関心が拡大し、「水俣」の社会的構築が批判的に検討されてきたことを指摘した。

第２章　水俣湾埋立地の景観形成過程

水俣湾の埋立て事業や埋立地活用をめぐって様々な団体が作成した要求／抗議文書を時系列に沿って整理分析し、水俣湾埋立地の現景観を創出した歴史的過程として読み直すことで、水俣病問題に関わる多様な主体の歴史的絡み合いを析出した。その上で、筆者によるフィールドワークのデータをもとに、「本願の会」による石像製作等の活動の概要と、石彫りの過程についての記述をおこなった。

その結果、1970 年代には水俣市の大多数を占める団体が水俣湾を「明るいまちづくり」のための場と位

置づけたのに対し、患者認定をめぐる行政の不作為が顕在化する中で、いくつかの患者団体は被害の痕跡・証である水俣湾の埋め立てを「隠蔽」と捉え、反対してきたことが明らかになった。1980 年代になると地域再生事業にむけた対話と歩み寄りが進められ、「明るさ」を求めた人びとの間でも限定的ではありながら「水俣病」をめぐる過去を受容する必要性が認識され始めた。しかし、地域再生・環境再生のアピールを主眼に進められた埋立地活用や水俣病の政治解決を前に、問題の収束を危惧した被害者たちは、制度的「救済」では癒えなかった心情を表現するための場として埋立地を捉え直してきた。その認識は 2 種類の要求を生み出した。(1) 埋立地の活用中止や永久放置であり、救われてこなかった心情の証しを後世に残すことが求められた。(2) 1995 年に発足した「本願の会」による石像建立の要求であり、埋立地の景観に個々人の受難の記憶を新たに刻み込んでいくことが求められた。制度や法律では癒えなかった水俣病の記憶を語るだけでなく、石像というモノに半年近い時間をかけて刻み込む作業は、能動的な自己救済の試みと評価できた。しかし、それらの石像は単なる水俣病被害の政治的な表象ではない。石彫りの過程についての記述からは、(1) 製作者が思い描いたモチーフを石に刻もうと試みる一方で、石は一定の自律性を保ちつつ、予期せぬ形象として現出することで、製作者に「出てくる」という経験を促すこと、(2) ノミを介して身体と石とが響き合う経験は、製作者を問う声や祈りに関するメッセージとして受けとられることで、さらなる行為を導いていくことが明らかとなったのである。

第 3 章　「本願の会」による石像の形態と空間配置の経時的変化

「本願の会」による石像 52 体の緻密な観察・記録・図化をもとに、その形態と空間配置の経時的変化に関する分析し、いったんつくり出されたモノが、つぎなるモノを生み出す行為にいかに作用するかを検討した。石像は、海に向かう西向きの面に主要モチーフが彫られている点で共通しており、本論文ではまずこの点に着目しつつ形態分類を行った。石像のなかには、地蔵や恵比寿といった一般的な神仏として定義できる事例ばかりでなく、表情や持ち物、手の形を神仏像の一般的特徴から個々人の想いと関連するかたちにずらした事例が多く存在する。そのほかにも、幼少期の自己のイメージを彫り込んだものや、魚や猫、トトロなどの多様なモチーフが認められる。石像の形態分類と、記年銘及び聴取調査の情報を併せることで、これら形態のズラシや多様化が、「地蔵」を基点としつつ徐々に進行してきた様相を析出した。さらに、水俣湾埋立地の親水緑地という限られた空間範囲のなかではあるが、形態のズラシや多様化が進行するにつれ、石像の配置もまた多様化してきていることを見出した。特に、初出の形態の場合には既存の石像の分布範囲から離れた場所に設置される傾向にあったことから、「本願の会」のメンバーが行なってきた石像設置による景観の更新に際して、既存の石像との関係性が意識されてきたことを指摘した。

その上で、形態のズラシや多様化についての理解を深めるために、西向き以外の面に彫られた副次的なモチーフを視野におさめつつ、モチーフと記銘の配置やモチーフ間の関係性について記述した。その結果、(1) 形態のズラシや多様化は主要モチーフ以外の側面でも生じてきたこと、(2) 新たな石像が製作される際に、既存の石像との関係性が意識されてきたこと、(3) 石彫りやその他さまざまな機会における対話のなかで各メンバーの着想や意図が伝達されてきており、そのことが既存の石像の参照や（差異化を伴う）模倣を促してきた可能性を指摘できた。これらのことから、「本願の会」による石像が、メンバー間の（ときにモノを介在させた）対話を通じて生み出されてきたモノであると論じた。

第4章　モノを媒介とした水俣病経験の語り直し

「本願の会」結成の大きな原動力となった0氏（男性）による石像と語りの関係性に着目し、モノを媒介とする水俣病経験の語り直しのプロセスについて検討した。0氏は幼少期に父親を劇症型水俣病で亡くした経験から、その「かたき討ち」を胸に1970～80年代の水俣病をめぐる運動に主導的立場で関わってきたが、「仕組みのなかの水俣病」に限界を感じたことによって1985年に運動を離脱し、制度への働きかけに依らない独自の活動を展開してきた人物である。

まず、語りの分析から、水俣病をめぐる患者運動や裁判への関わりを通じて、0氏による自己認識が告発者から問われる者へと変化してきたこと、そして「魂の痛み」とともに自らの罪を対象化する過程のなかで、0氏によって想起される「水俣病経験」の範囲が、劇症型水俣病で亡くなった「父親のかたき討ち」（1974～85年）から、父親以外の死者や人間以外の生きものたちを含めた「水俣病」（1986～96年）へと時間の経過とともに拡張してきたことを読み解いた。その上で、1997年以降の語りの変化と0氏によって水俣湾埋立地に建立されてきた石像の関係について分析した。

0氏はまず、97年10月に自己をモチーフとする石像を建立した。同年11月の語りからは、「気味が悪い魂」という言説に直面した0氏が、「魂とは何か」という問いに答えるための手がかりを「水俣病」以前の漁村の暮らしの記憶（命の共同性、命のつながり）に求め、その再現を希求していたことが読みとれた。2体目の恵比寿像が設置されたのは、この語りを発してから8ヶ月後の98年7月である。0氏の身近にあった恵比寿が「命の共同性」という答えを想起させたのか、それとも答えに辿りついた後に恵比寿を「命の共同性」の象徴としたのか、その先後関係は不明だが、埋立地に建立された恵比寿像は、問いと答えをとり結ぶ媒体として恵比寿が位置づけられていることを示唆する。その後、0氏は「授かる命」という概念を手がかりに、現代社会の諸問題と水俣病経験との連接を試みはじめる。99年10月以降の語りにおいては、水俣病を生き抜いてきた人びとの行為が暗示する「命」との向き合い方を中心に物語が組み立てら

れ、それが現代社会における諸問題と対比・連接されるという特徴がみてとれた。0氏が「胎児」、「オタマジャクシ」、「精子」といった命に関わるモチーフの石像を建立したのは、「授かる命」について語り始めてから2年半近く経った2002年2月である。この先後関係から、この石像の製作・設置という行為は、0氏のそれまでの語りに実感を付与する経験となった可能性が浮かび上がる。その経験は、しかも、「命」の視点から紡がれた物語へと引き続いてゆく。0氏はこの石像の建立後、「ほかの命から見たら」と問いかけつつ、毒さえも引きとって抱いていく「自然」や「生きもの」の存在、そしてその奥にある超自然的存在（守り神としての魚）について語り始め、その過程で2003年2月にトトロをモチーフとする石像を建立したのである。

0氏の語りと石像の連鎖的で継起的な関係から浮かび上がったのは、主体としての人と客体としてのモノという図式ではとらえきれない、両者の往復運動である。そこから、石像の製作プロセス、そして自らが建立した石像を水俣湾埋立地で目にする経験が、0氏のそれまでの語りに実感を付与し、過去を想起させ、さらには新たな意識を喚起する機会となってきた可能性を指摘した。

第5章　モノが／をかたちづくる水俣の記憶

水俣病をめぐる運動や裁判に積極的に関わることのなかった「本願の会」メンバーによる石像製作と語りの実践を事例に、語りが変化していくプロセスと、変容しつつも持続性をもち、ある場所に存在することで周囲の景観と複合的に作用するという石像の性質が、どのように作用し合ってきたのかを通時的視点から考察した。

水俣への移住者J氏（男性）の事例では、2008～2011年にかけてインタビューを重ねるなかで、J氏にとっての「本願の会」や石像が、同会の初代会長をつとめた水俣病患者Y氏と深く結びついていることがみえてきた。J氏が建立した石像は、地蔵のモチーフを基調としつつも、その表情においてずらしが認められた。この石像は、Y氏が脳梗塞のため入院していた時期に製作されたものであり、そのプロセスはJ氏にとって、石を通じてY氏と対話する機会であったことが推測できた。筆者が石像の「苦しそうな表情」について質問を投げかけると、J氏は「Yさんに似ちゃった」と語っていたのである。それゆえ、J氏による石像製作は、対話という側面をもつだけでなく、Y氏という当事者の身体のあり方を石に再演することを通して、水俣病という出来事を内的に経験し直すプロセスだったのかもしれない。Y氏が2002年に亡くなってから約7年後、2009年以降の語りには、風化に伴う石像の表情の変化や、石像の周囲に集う子どもたちや生きもの存在によって、J氏に新たな意識が喚起されている様子がみてとれた。2010年以降のJ氏は、Y氏による「お地蔵さん像」を「水俣病からの解放への願い」という自分の言葉で語り直しつつ、

Y氏の想いを「来世」との関連で捉え直していたのである。

次に、水俣病問題について長年沈黙を続けてきた患者遺族A氏（女性）が建立した 2 体の石像と語りの実践の通時的な関係に着目した。A氏は幼少期の自己をモデルとする着物姿の少女の石像を 1997 年に、母親に抱かれた洋装の少女の石像を 2003 年にそれぞれ建立してきている。まず 1 体目の石像と A 氏による語りの関係性を通時的視点から読み解くことによって、この石像の製作から設置に至るプロセス、そして 97 年以降、この石像を水俣湾埋立地で目にする経験は、幼少期の自己だけでなく、水俣病で亡くなった父親の記憶を客体化する機会をA氏に提供し、その言語化を促す触媒として作用してきた可能性が浮かび上がってきた。一方、2 体目の石像に関しては、言語によっては筋立てることが困難な想いが、2003 年にはモノとしての石像に先行的に表現されていたことが示唆された。そこで、語り得なさと石像の関係について理解を深めるために、語りの現場としての石像に着目した。水俣湾埋立地で行ったインタビューの検討を通じて、A氏によって建立された母子像が、言語化し得ない心情を想起させる媒体として作用してきている可能性を指摘した。さらに、石像に刻まれた波のモチーフと A 氏による「夢」の語りの分析を通じて、A氏は石像の視線の先にある恋路島に「甦り」のイメージを託し、自然の営力がA氏に想起させ続ける命の存在に、人びとが気づいてゆくことを希求していることが明らかとなった。

以上の分析結果をふまえ、(1) 石像の持続性が、既に亡くなってしまった死者や幼少期のはかない記憶の言語化を促すとともに、ときに語り得ない心情を製作者に想起させること、(2) 風化による石像の変化は、石像と結びつけられたイメージの変容を導く場合があること、(3) 周囲の景観と複合的に作用するという石像の特性は、過去の経験だけでなく、「来世」や「甦り」といったある種の未来を想起させる効果をもつことを指摘した。

終章　結論

これまでの議論を振り返り、歴史人類学や「物質文化研究」のなかに本研究の成果を位置づけた。

各章の分析と考察が示唆するのは、患者認定や補償、政治的な解決というコンテクストで語られる完結を前提とした「水俣病」とは対照的に、モノと語りの響き合いのなかで多層的・多元的な現実として想起されてきている未完結の「水俣病経験」の存在であった。しかし、「本願会」の実践は、必ずしも近代的な枠組みによって構築・操作される本質主義的な「水俣病」への抵抗ではない。記憶の政治性や文化の構築性を重視する人類学者たちは現在における再文脈化のあり方を強調するあまり、「単一のリアリティ」や「政治的・戦略的な主体」を前提とする傾向にあったのに対し、本研究では、想起のプロセスをモノと語りの響き合いとして記述することによって、予め設定された意図に沿って過去の経験が構築されるので

はなく、想起される経験が継起的・偶発的に移ろいゆくことを見出した。その具体的なありようを検討した第4章および第5章からは、水俣病経験の想起には言語化し得ない心情が含まれ、それがモノによって表出され、そのモノが語り直しを促していくこと、さらにはモノそれ自体が時の流れのなかで変容し、そこに生き続けることが新たな想起を促す契機となってきていることが析出されたのである。ここから、本研究が明らかにし得たのは、モノや語りに表象される過去の水俣病経験ではなく、モノや語りを媒介としつつ生きられる水俣病経験のダイナミックなありようであったと結論づけた。そして、想起のプロセスをモノと語りの響き合いとして通時的に分析する本研究の手法が、出来事のクロノロジー的再構成、記憶の政治性や文化の構築性の強調に陥ることなく、被害と加害、分析対象とコンテクスト、主体と客体、現実と表象というさまざまな二分法的図式を乗り越える一つの方途を指し示していると論じた。

その上で、今後の展望として、“object”と“thing”、物質としての「物」と行為者としての「者」という二分を乗り越えるための新たな人類学の可能性を考察した。本研究が光を当てた「本願の会」による石像は、場面や関係性に応じてその存在の仕方を変えるだけでなく、祈りを伝達し、新たな自己意識や言語化し得ない心情を表出させ、ときには死者といった目に見えないものに成り変わりつつ、新たに多元的な現実を構成していく動きのプロセスとしてあった。このことから、従来の「物質文化研究」が前提としてきた“object”、“thing”、“material”という3つの概念に対し、より包括的な概念である日本語の「もの（*mono*）」をプロセスの概念として捉え、モノに付与される意味や、モノが媒介する人間の意図のみには還元し得ない「もの」の移ろい、すなわち、「もの」が「もの」になるプロセス、あるいは周囲に存在する「もの」との関係のなかでその存在の仕方を変容させていくプロセスを記述し得る新たな人類学の必要性を指摘した。

Keio University

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number:	□ "KOU" □ "OTSU" No. *Office use only	Name:	Shimoda Kentaro

Title of Thesis:

Historical Anthropology of Remembering of Minamata Disease Experiences: Diachronic Analyses of the Resonance of Artifacts and Narratives

Summary of Thesis:

In 1990, part of Minamata Bay in Kyushu, the south-western region of Japan, was reclaimed by the Kumamoto prefectural government. The bay had been heavily polluted with organic mercury from a Chisso Corporation factory. In 1995, a variety of people affected by this pollution founded *Hongan-no-kai*, and members of the group have since carved various stone sculptures; these works include Buddha *Jizo* statues in traditional and modified styles. They have cumulatively placed a total of 52 statues along the sea-side edge of the landfill site as mementos of the tragedy. The pain felt by these victims has not been mitigated, despite acknowledgement by politicians and compensation payments for those who suffered severe mercury poisoning (known as Minamata disease). My fieldwork, which took place over 26 months between 2006 and 2015, revealed that these statues are not merely static representations of the Minamata disease incident. Rather, the victims continue to live their experiences both sequentially and contingently. Their memories of Minamata disease are articulated through the creation of the stone artifacts and their associated narratives. Any analyses, therefore, should focus on the temporal processes of the mutual resonance between artifacts and narratives.

First, temporal changes in style and arrangement indicate that these statues, remaining at the landfill since their placement, were made through communications among the members of *Hongan-no-kai* and by referring to existing statues. Second, my scrutiny of the temporal interaction between the narratives of three members of *Hongan-no-kai* and their statues, based on interviews and a number of historical documents, revealed the following: (a) their experiences of carving the stone statues seem to have evoked feelings that are difficult to express in words; (b) these statues have helped their creators to recount these emotions repeatedly; and (c) gradual transformation of their statues by natural weathering and changes in the surrounding landscape have created possibilities for the members to awaken various emotions relating to their experiences of Minamata disease. These results suggest that these

people live in both constructed and constructing landscapes that continue to allow them to experience sequential and contingent remembrances of Minamata disease.

The principal aim of this thesis is, by situating "making history" in which certain events are selected, characterized, and recontextualized within a broader and longer diachronic process, to illustrate that oppositional objectification of past experiences is one phase of sequential remembering. It should have become clear that while experiences of Minamata disease have in part been intentionally constructed, they have been transformed sequentially and contingently as well. Chronologically reconstructing sequential chains of narratives, which are virtually momentary because of their verbal nature, and properly describing the resonance of narratives with artifacts in a diachronic ethnography will contribute to methodological discussions on overcoming dichotomies such as victim and wrongdoer, text and context, subject and object, and reality and representation.